

猪犬と登る猪獵の頂点へ

猪獵の上級編 ② 田宮 治

戦い済んで思つこと

たかが猪獵であるが、壮大な目的意識を持ち続けて戦い続けてきた成果が、このガリ戦をものに見事に完勝で飾る夢の頂点に繋がったのである。

「さあ、この先はお前たちでどんどんやってみろ」

こんな至難も乗り越えられたのだから、どんな猪獵でも必ずできるはずだ。まず、この私を越えて魅力ある自分たちに合った独自の猪獵道を構築してもらいたい。そして、人生に彩りを添える楽しい猪獵を次世代に繋いでほしい。

私はようやく訪れた勝利の極致でもう一度この激戦を振り返り、「あそこで二発撃ち、ここで決めたのだなあ……」と、絶対に忘れないように吟味し、そして二年間

の重任をやつと果たせたことがうれしかった。

三人に引き下ろされて行く猪を、マロ号たちが「ジジと俺(犬)たちのものだよ」と言いたげに低く吠え、後を追おうとするのを「よしよし、待て待て」となだめ、全身を撫で回し、「今これほどの心境になれるのはお前たちのお陰だ」としみじみ感謝した。

私がここまで冷静に判断できるのは、度重なるガリ戦の体験から戦術や攻めの気持ちが集約されてきたことに加え、絶対の自信があつたのは、犬たちの猪止め技術の高さだったのである。

繰り返し言い続けている「猪獵は犬次第であり、犬たちがこのガリ戦を攻め抜き、必ず押し落とし来る」と信じていたからこそ、堂々と真下に立つて勝負に出られたのである。

ちなみに、ガリ戦であっても、一流犬群ならいつでも必ず下に攻め落として来るものである。飛び下りて来る猪を下から迎え撃つのは、山鳥の沢下りを撃ち落とすよりも遥かに簡単である。

しかし、その迫力はもの凄いで、危険防止の意味からも山鳥撃ちと同様に何度も実体験して、いつでも堂々と勝負できるように日頃から鍛え上げておきたい。

特に真下から迎え撃つ時、「この！」「おら！」とか大声で怒鳴ることは、猪の直撃から体を守る大切なことなので、忘れずやってみるとよい。この何でもないような猪に寄り付く時の怒鳴り声や、戦いの相手がどんな猪かをいち早く気付くことが勝負の決めどころなのである。

そして、「よく頑張ったが、あと一步のところまで逃げられた」と

いった猪獵のポイントは、勝負の流れを大きく変える重要なことなのである。よく検証して、これらの戦法を使い慣れることで克服していかなければならない。

いずれの獵法も、今までは私が押し出す俺流の猪獵法であつたが、これからは北嶋氏を中心に、今回のガリ戦を参考にして前記の猪獵の重要点を課題として全員で頑張つて、効率良い技術に独自に改良して楽しんでいけばよいことだと思ふ。

本来、私が今この場で言うことではないが、いつの日かこの記事を読んだ時に私の存念を理解して、十分に実行できるようになつていてほしい。

そんな途方もないことを考えながら、犬たちの真ん中にどっかり腰を下ろし、全犬の頭を撫でながら「凄い攻め落としだったなあ。思いどおりに撃てたのはお前たちのお陰だよ」と褒めたたえた。そして、短いようで長かった二年間の苦楽の道程に思いを馳せていた。

「これでいい。俺は自分なりに



山梨の猟場は藪や杉林が少なく見通しが良いのでライフルが存分に楽しめる。山は高いが谷越しで200メートルくらいどンドン撃てるので、犬さえ良ければ単独猟で腕が研ける

考えて、今できることはすべてやったのだから思い残すことはない。あとはお互いにわが道を突き進んでもらえばいい」

ちよūdとその頃、「もう犬を放してもいいですよ。車に着くから」と北嶋氏が言ってきた。犬たち「さあ、行こう」と声をかけ、その場で放して後に続き、ゆつくりと足場を確認しながら下り始めた。極度の緊張から解きほ

ぐされて、まるで夢の中を歩いていようだった。

眼下に広がる小川や田んぼは絵に描いたように美しい。その絶景の右側の山下に小さく民家が見える。今朝、北嶋氏が挨拶した飼いが犬が鳴いていた家だ。至難の戦いではあったが、まだ一戦が終わったばかりで、辺りは日が高く山々は光り輝き、まるでこの勝戦を祝福しているかのよう

に思えた。そんな中を二年間の実績を噛みしめながら、小峰伝いにゆつくり歩いて全員が待つ車に戻った。

そこには全員が既に揃っており、軽トラックに猪を積み込んで帰り仕度も出来上がっていた。そして、立ち話をしながら私の帰りを待っていた。

私を待ち兼ねていた北嶋氏は、遥か向こうの大山を指さして「あの大杉林で犬たちが猪を止めたのにあと少しで逃がし、必死で猪を追って左側の杉林を登り、大峰を回って、ちよūd大竹藪の手前の松の木の上で戦ったんだ」と、激戦のあらましを満面の笑みを浮かべながら話してくれた。

大猪を逃した悔しさはもう既になく、勝利の喜びに浸っているように思えた。他の人もそれぞれ自分の立場で、存分に戦った様子を難戦の大山を望みながら嬉しそうに説明していた。私は「凄い戦いだったが、よくもまあ、あんな所まで攻めまくったものだ。本当に素晴らしい、見事な戦いぶりだったよ」と心から激励し感謝した。

猪猟談議は尽きないが、私たちはパジェロに乗せ、「お待ちどうさま。さあ、行きませうか」と楽しさをひとまず中断して帰りを促した。

猪を積んで悠然と前を走る北嶋氏の車を見ながら、猪猟は猪が獲れてなんぼのものであり、どんなに善戦し、死力を尽くしたところで猪を逃がしたのでは何も残らない。特に成長期の若者たちにとって、今日のように激戦で猪を獲った成果は必ず先に繋がることになる。

未来に繋げる究極の猪猟道

グループ猟では猪が獲れないと全く面白くないわけだから、猪を獲って盛り上がること（成長の元）がないまま、ただ疲れ切った解散の道をたどるといふ話をよく耳にする。

私が出猟する関東地方の猟場は、年中駆除が行われているので猪が激減している。その中で猟場に残っているのは、戦いつらいグレ猪ばかりで、なかなか成果が上

がらず、並のグループでは存続が難しい状況になってきている。

以前は関東近辺のどの猟場でも三十人以上の大グループと出会い、いくつもの大山を独占し、大山全体を大勢の若い獵人たちがタツを張り、何頭も猪を獲ってわが世の春を謳歌していた。だから、獲れて当たり前の時代であった。

ただし、私のような単独獵人は邪魔者扱いで閉め出されていた。

ところが最近では、寄る年波や猪の激減、さらに狩獵界を取り巻く規制の強化も相俟って、大グループも十人前後のグループに様変わりしている。この人数で同じ大山を囲むのだから、当然タツの間隔は大きくなり、それまでの追い犬を使った猪獵は成り立たなくなってきた。

鹿は追い犬で攻めればまたたく間にタツに嵌まり、何頭でも獲ることができ、逃げることに長けた猪になると、よほど追い犬芸が優れ、急迫するかチョンがけ（逃げる猪にギヤツギヤツと鳴きながら咬み付く）の一芸がない限り、まずタツに嵌まることはない

し獲ることも難しい。

事実、私の知っている群馬や山梨で名高い大グループでさえも、人員が激減して十人前後のグループになってきている。昨年度（平成二十三年度）の猪獵成果も何と「三頭だった」「十頭獲るのがやっとだ」などと聞いている。

こうした状況は全国的に見ても同じで、ここ三年くらいの間に本誌の私の記事を読んで「田宮さんのような猪獵がしたい。ついでに仔犬のことや仕上げ方を教えていただきたい」という内容の連絡が実に多く来るようになった。

その多くの人は「今までのグループをやめたので、気心の合う仲間と猪獵を続けたいので、ぜひ単独獵（一人〜三人）での猪止め猟法を教えてもらいたい」といったものである。

とてもうれい話で、私にできることは全力でサポートしていきたいと思うが、同時にこの状況は以前から危惧していたことで、猪獵道の未来を塞ぐ大きな問題であると考えていた。これは猪獵だけでなく狩獵界全体のことであり、

実に恐ろしい時代に突入したようである。

十年くらい前から猪獵の現状や将来に不安を感じ、その対策に万全を尽くしてきたが、さらに狩獵界を取り巻く環境は厳しく規制され、至難の課題が山積している。どんなに難題であつても、法で規制されれば堂々とその法を守って乗り越える以外ない。

私はそんな課題を黙って見ていられなかつたので、『狩獵界』誌などに投稿して喚起を促したりもしてきた。

そして、一人でも猪が獲れる完璧な猪犬を完成させて、その一流犬群を起爆剤に誰にも頼らず独自の猪獵を楽しみながら、自分が信じる最高の猪獵道を登り続けてきたのである。

ちなみに私の昨年度の猪獵の実績は、単独獵で猪だけで五十六頭、全盛期の百頭には及ばないが満足はしている。そして、この猪獵道の正しさに自信を深めているところである。

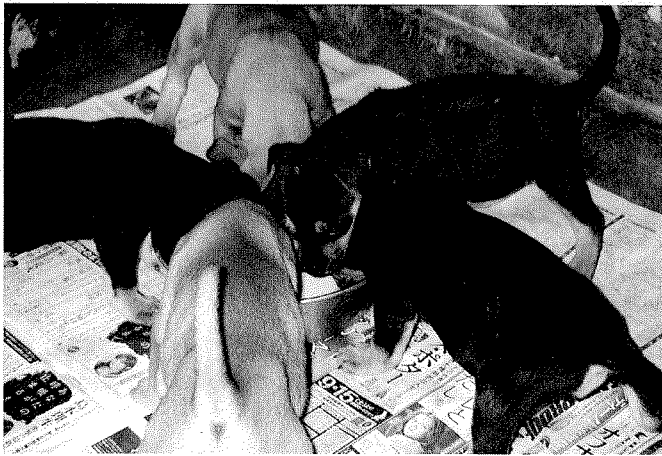
「猪犬と登る猪獵の頂点へ」を三年前から本誌で連載を始めた

きっかけは、猪獵に対する私の気持ちの一環である。この第一の目的は、激減する狩獵者人口の底上げとなる若者たちの育成であり、一人でも多くの猪獵人の完成であった。

若者たちが猪獵に本気で取り組む姿と、その上達具合を何度も実戦を通して発信し続けていくことで、誰もが猪獵を理解でき、すぐにやってみたくなるような実践方法を伝えたいのである。そして、一人でも安心して猪が獲れる安全で魅力ある猪獵を、この大事な時期に何としても確立したかったのである。

何度も繰り返し発信しているのは、こんな危機的状況下にもかかわらず、何の疑問も持たず起死回生の手段も打たず、ただ黙って見過ごしているのでは、いかに大切な猪獵であつてもやがて消え行く定めとなるだろう。

大好きな猪犬や猪獵、実戦で覚えた猟法、そして、やっとな掴み、作り上げた猪獵の王道さえも、若者たちを育てた上で理解し守ってもらって、その先に繋いでいって



仔犬はこのくらいまでに言葉かけを行う。猪肉を与えたり、つないで引いてやる。当然、車に乗せる訓練をして慣れさせることも大事なことである

もらわないことにはどうにもならないのである。

どんなに努力し頑張ったところで、人間は必ず年をとる。その生きていく間に人は、何をなして何を残せるかが人生最大の課題だと思ふ。狩猟界は今まさにそんな危機的な状況の中にある。

自らで使命を努力し押し上げて限界まで高めることで、極致の猟道となしてその技法を生かして使

い、未来に残さねばならない時が来ているのである。

まず、猟人がこの状況に気付いて、一人でも多くの若者たちを育ててほしい。とどまるところを知らない右肩下りの狩猟界にあつて、起死回生の特効薬などいくら望んだところであるわけではな

い。あるのはそれぞれの猪猟人がやり抜こうとする心意気と、絶対に残すのだという強い意識改革だ

けである。

達人は達人の猪猟技術を、ベテランはベテランの味付けで、これまでの排他的な猪猟界を凌駕して、猪猟人全員が寄り添い助け合つて仲良く楽しめる、生き甲斐となるような猪猟の未来道を目指してもらいたいのである。

奇跡を信じて、各自が極めてきた猪猟の得意な分野を率先し、猪道改革や未来に繋げる努力を实践すれば、危機的状況を脱せる。まだまだ遅くはないはずである。

どんな状況でも、決して諦めないできつちり現況を見極め確実な手段を講じていけば、必ず期待の王道は開けてくる。そして狩猟者人口の激減にも対処できる楽しくてかけがえのない猪猟を残していけると思ふ。

基本的な立場や考え方、そして押し進める猟法の違いはあるが、皆が同じ志向を持って、猪猟の未来に繋げるための意識改革をしなければならぬ時機に来ている。

この時機に一番大事なポイントは、これまでの猪猟を総点検して

見直し、改めて猪猟の未来を見据えて方向転換しなければならぬ。

年齢からくる誰もが越えられない壁や、苦勞ばかりで面白くも楽しくもないことなどによって狩猟者人口が減少し続けている。

たとえ一人になったとしても、誰にも頼らず生涯現役で心ゆくまで楽しんで、生き甲斐になる究極の単独猪猟法や、少数グループでも今までの追い犬を止め犬に変えるだけの発想転換で、思いどおりに猪が獲れて、仲間意識が充実して、自然と若者たちが集まって来るような気楽なグループに生まれ変わることなのである。

どんな悪い状況下でも無理なく実践でき、面白く楽しい究極の猪道を目指すことは大変だが、とにかく頑張つてやらないことには話にならない。このあたりの大事ことは狩猟界の偉い方々に考えていただいて押し進めるのが筋道だと思つている。

(つづく)